

# 戦前期女子留学者の渡航目的および派遣機関の動向について —高等教育機会と専門職位の獲得を求めて—

佐々木 啓 子

## Female Study-abroad Students in Pre-war Japan : Pursuing the Opportunities for Higher Education and the Career as the Professions

Keiko SASAKI

### Abstract

In the early Meiji period, many missionaries were sent to Japan by American evangelist groups. These missionaries established mission schools, particularly for girls. At these girls' mission schools, female missionaries conducted education on Christian principles. At the same time, at schools such as Kobe College, they also promoted women's entrance to higher education and study abroad. Upon returning to Japan from their studies abroad, they became teachers or professors at institutions of higher education. In addition, in the first half of the Meiji Period, when women could not receive formal medical education nor obtain a license to practice medicine, some women studied abroad in the United States or Germany seeking to obtain a Doctor of Medicine (MD) from a foreign university. Further, private hospitals spearheaded studies abroad for the discipline of nursing in order to achieve nursing of the same quality as that of Europe and the United States.

This phenomenon, that is, the transnational movement, can also be observed in the study-abroad behavior of European and American women from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century.

Key words : female study-abroad students, girls' mission schools, female missionaries,  
female doctor of medicine, nursing education, transnational movement

### はじめに：トランスナショナルな移動のはじまり

200 年余の鎖国を廃した日本は近代化を推進するために、欧米諸国から近代国家の制度の移入を求めて交流を始めた。それは国家的事業として、また民間においても、国全体で西洋化を志向した。その一つが、明治政府が送り出した年間、何百人にもものぼる海外留学生であった。日本の近代化過程における海外留学については、男子については多くの調査研究がなされているが、女子につい

ては、女子高等師範学校からの公費による派遣留学生についての研究<sup>1</sup>は見られるものの、私費留学を含めた総括的な調査が十分になされたわけではない。一つには、男性に比べて公費留学者が極めて少なく、主に私費留学であったことに起因すると考えられる。しかし近代学校制度が整備され女性の教育レベルが高まるにしたがって、女子教育機関が、その後継者育成のために機関ごとに留学生を派遣した。こうしたことから、女子留学生の状況は各教育機関ごとに把握されるようになった。

Received on September 5, 2019.

共通教育部 総合文化部会

<sup>1</sup> 柴沼晶子、「英国留学で得たもの—安井てつと大江スミの場合を比較して—」『敬和学園大学紀要』第 8 号、1999 年、243-267 頁。Yoko Yamasaki, *Tetsu Yasui and Transcultural Influences in Educational Reforms for Women*. "Bulletin Research Institute for Linguistic Cultural Studies", 2015. Sally A. Hastings, *Japanese Women as American College Students, 1900-1941*, Alisa Freedman, Laura Miller and Christine R Yano eds. "Modern Girls on the Go: Gender, Mobility and Labor in Japan", Stanford University Press, 2012, pp.193-208.

筆者は、これまで、女子ミッション・スクールの歴史的研究のなかで、ミッション・スクール出身の教育者や社会的な活動の中心となってきた女性たちのなかに、海外留学経験者が多いことに着目してきた。<sup>2</sup> また、医学・看護などでは、病院など民間団体での女性留学が先行していたが、そこでも顕著なのは、ミッシヨナリーの存在である。19世紀後半、欧米各国のキリスト教海外伝道において、布教の一環として教会附属の神学校などの学校が設立されたが、同時に極めて重要視されていたのは医療事業であった。宣教師のなかで医療宣教師の数は少なくなかったのである。<sup>3</sup>

近年、女子教育史の世界的な研究において、トランスナショナルな女性の移動研究が潮流となっている。<sup>4</sup> そのなかでも19世紀後半の欧米において、高等教育志向の女性たちが、そのキャリア形成において海外留学をどのように捉えていたかは、その国の教育制度との関連では興味深いものがある。例えば、19世紀のロシアでは女性が医師になるための教育を国内では受けることができなかったために、海外の大学に留学する女性たちがいた。<sup>5</sup> 伝統的に外国からの学生を比較的多く受け入れていたスイスのいくつかの大学には、19世紀末から第一次世界大戦期までに、ロシアをはじめドイツ、オーストリア、フランス、イギリス、そして、すでに女子大学が存在するアメリカからも多くの女子学生が、男性と肩を並べて医学、理学、文学などの博士学位を求めて入学したのであった。<sup>6</sup> 彼女たちは自国での高等教育機会および専門職資格制度から排除されたり、あるいは自国で入学可能な女子カレッジよりもスイスの伝統的な共学大学の教授陣が優れていることや、医学においては附属病院などの実地研修も提供されるなかで医学博士号が取得できるなどの理由により、スイスを目指してやってきたのであった。<sup>7</sup> また、アメリカの女子留学生の場合は人文社会系の博士学位取得者が、医学や自然科学より

も上回っていたが、<sup>8</sup> それはおそらくは留学によって男性と同じ大学での博士学位を取得することが、アメリカの女子大学において、研究職あるいは教授職さらには学部長や学長への道を開くことを可能としたからと考えられる。<sup>9</sup> このように、19世紀末のヨーロッパにおいても、女性たちは自国の教育機会と職業資格制度の障壁を乗り越えるために、国外に活路を求めていたのであった。

以上をふまえて本論では、戦前期日本の女性たちが、海外留学をどのように捉え、何を求めて留学したかを明らかにするために、まずは明治初期の日本の留学制度を概説し、女子留学生を海外留学者名簿や人名録などを参照してリストアップした。その(表1)をもとに、公費留学と私費留学(表では「自主渡航」)を対比させながら、特に公費以外で留学した女性たちのルートとしてのキリスト教伝道師会(本論では適宜、ミッシヨナリーと称する)、特に大多数を占めていたプロテスタント系のアメリカ伝道師会と女子ミッション・スクールに焦点をあてよう。さらに女子留学生たちの出自や留学にいたる経緯や留学時の社会状況、留学先での勉学、帰国後のキャリアなどの事例を検討しよう。最後には欧米の女性たちの動向を参照しながら、戦前期の女性の留学を、トランスナショナルな女性の移動研究のなかで捉えることを試みよう。

なお、本論では、「トランスナショナルな移動」とは、各国家の制度を保ちながらも国家間を通底する共通の枠組みのなかでの移動と定義し、「国際化」という、あくまでも各国家の体制を堅持しながら交流するあり方とは異なり、さらには国境を越えて人、資金、情報が容易に移動する「グローバル化」とも異なるものとして用いる。

## 1. 明治政府の積極的な留学推進政策

ペリーの浦賀沖来航以来、幕末から明治期には幕府お

<sup>2</sup> 佐々木啓子「近代日本における都市中上流階級の階層文化と教育」『電気通信大学紀要』第24巻 第40号、2012年、19-29頁。佐々木啓子「婦人雑誌『新女界』の記事および執筆者の学歴・キャリアからみる知識人層の女子教育観と学校選択」『電気通信大学紀要』第29巻 第1号、2017年、1-14頁。佐々木啓子「進学名門校『女子ミッション・スクール』の歴史社会学的分析—都市市民層の教育期待に着目して—」『日本教育社会学会第68回大会発表要旨集録』2016年、12-13頁。

<sup>3</sup> アメリカ長老派の宣教師で横浜居留地で本格的な和英辞書『和英語林集成』を出版し、後に明治学院の総理を務めたJ.C.ヘボン(1815-1911)は、医療宣教師であった。彼はプリンストン大学を卒業後、さらにペンシルヴァニア大学で医学を学び、医療宣教師として中国でも活躍した実績があった。クララ夫人が開設した「ヘボン塾」で学んだ日本人は多く、夫妻が明治期の日本人に与えた影響は大きい。参照：横浜プロテスタント史研究会編『横浜開港と宣教師たち』有隣新書、2008年、17-40頁。

<sup>4</sup> Eckhardt Fuchs & Eugenia Roldán Vera eds., *The Transnational in the History of Education: Concept and Perspective*, Palgrave Macmillan; 1st ed. 2019.

<sup>5</sup> 橋本伸也「女性医師課程の誕生と消滅—帝政期ロシアにおける女性医師と医学教育」、望田幸男・田村栄子編『身体と医療の教育社会史』昭和堂、2003年。

<sup>6</sup> ナターリア・ティコノフ／前田更子 訳「第1章 女性に、世界に開かれる—スイスの大学における女性の進出と国際化、1870-1930年」、香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育』昭和堂、2008年、21-53頁。

<sup>7</sup> 同上、22-35頁。

<sup>8</sup> 同上、35頁。

<sup>9</sup> 同上、42-46頁。

よび雄藩から西欧へと派遣団が渡航し、西欧諸国の視察と知識の獲得のための留学が奨励された。それは新しい日本のリーダー育成のための喫緊の課題であった。こうしたなかで、女性の渡航者もいくらか散見できるが、その期待された目的としては、幕末期は日本文化の紹介としての技芸従事者、明治初期には華族の海外渡航の随伴および外交官夫人などの西洋的生活様式の移入が目的であった。<sup>10</sup>

1869（明治2）年1月には外国官（外国事務局）が「海外旅行規則」を制定し、海外旅行（洋行、留学のすべて）は条約締結国に限定され、帰化および改宗の厳禁（帰国後）、留学期間も10ヶ年を限度としていた。<sup>11</sup> 政府の留学への積極的な方針のなかで、大蔵省、工部省、民部省、太政官、兵部省などの省庁は競い合うようにして官費での留学生を派遣した。こうした省庁のなかで、北海道開拓使は当時、最も海外留学に積極的な部局であった。北海道開拓使長官であった黒田清隆の発案に基づき、海外留学、地域総合開発、西洋知識・技術の包括的導入と、農学、鉱山学、建築学、測量学、器械学、応用化学などを教授する教育機関として、北海道開拓使仮学校が開校されたのであった。北海道開拓使はこの後、開拓使仮学校（東京に設置）、開拓使医学校、開拓使女学校、北海道土人教育所を附設し、仏学課、地質測量生徒、電信生徒を包含していった。<sup>12</sup>

## 2. 日本の女子留学の開始

こうしたなかで、黒田清隆と、当時、アメリカ公使であった森有礼の間で、1872（明治4）年に津田梅子、山川捨松、永井繁子ら5人の少女が、北海道開拓使からの日本最初的女子留学生として岩倉使節団に同行してアメリカに派遣されたのであった。<sup>13</sup>

一方、1859年に、アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスの5か国は、開港された神奈川（横浜）、長崎、兵庫（神戸）、新潟、函館の5港と横浜、築地、大阪、神戸などの外国人居留地内での自由貿易が認められたため、この居留地には各国の領事館、郵便局、銀行、商館、出版社が立ち並び、教会や病院、各国軍の施設なども建設された。外国人居留地には貿易を目的とする商人とともに、キリスト教布教のための宣教師が多数、来日して、制約された範囲内で日本人への布教と教化を行った。居

留地へは日本人は自由に出入りすることできたため、海外貿易商のみならず、英語や西洋的知識を学ぼうとする青年、そして生糸や製茶業などに携わる女性たちも多く集まってきた。アメリカ伝道師会は積極的に女性宣教師を派遣し、日本の少女たちの教育に努めた。日本で最初の組織的な女子教育機関は、1875（明治8）年に横浜居留地に設立されたフェリス女学校であった。続いて長崎では活水女学校が、神戸には神戸女学院が高等な教育を指向した女子教育を開始した。横浜居留地ではその人口は5,000人に近づいていた。<sup>14</sup> 特に首都東京に近い横浜居留地は最も早く開設され規模も最大であり、西洋からの文明移入と人の交流の拠点であった。公務や商務で来日する外国人とともに、何百人という宣教師たちが来日した。1889年の時点で、527名の宣教師が来日したが、その3分の2は婦人宣教師であった。なぜならば、男性宣教師が派遣される際には夫人を伴うことが要求されたが、女性宣教師の場合はむしろ独身であることが望まれたからでもある。<sup>15</sup> さらに、ミッション・スクールの校数をみれば、1890年では女子ミッション・スクールが43校であるのに対して男子ミッション・スクールは13校であった<sup>16</sup>ことから、女性教員として婦人宣教師が派遣されることが多かったと思われる。これらの婦人宣教師たちは勤務年限の終了や、休暇のために数年に1度は母国のアメリカに帰国していたので、帰国の際に教会関係者の日本女性が伴うこともあった。

（表1）は明治期的女子留学生54名について、渡航年、帰国年、渡航先、受け入れ機関、専攻分野を抽出したものである。その多くの女性は、それぞれの領域でのパイオニアとして著名であり、人名事典、伝記や学校史にも掲載されている人物である。参照したのは以下の資料である。（表中の網掛けは公費留学生である）

- ・手塚晃 国立教育会館編『幕末明治 海外渡航者総覧』、柏書房、1992年。
- ・辻直人『近代日本海外留学の目的変容―文部省留学生の派遣実態について』、東信堂、2010年。「巻末 文部省留学生一覧表」。
- ・『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年。
- ・神戸女学院『神戸女学院 百年史 総説』1976年。
- ・神戸女学院『神戸女学院 百年史 各論』1981年。

<sup>10</sup> 富田仁編集、『海を越えた日本人名事典』新訂増補、日外アソシエーツ、2005年。

<sup>11</sup> 石附実『近代日本の海外留学史』中央公論社、1992年、175-186頁。

<sup>12</sup> 参考文献：井上 高聡「開拓使仮学校の設立経緯」北海道大学大学文書館年報第3号、2008年3月31日、1-17頁。

<sup>13</sup> 高橋裕子『津田梅子の社会史』玉川大学出版部、2002年。吉川利一『津田梅子伝』、津田塾同窓会、1956年。

<sup>14</sup> 横浜開港記念館『図説 横浜外国人居留地』有隣堂、1998年、pp.1-26, 30-31。

<sup>15</sup> 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師：来日の背景とその影響』東京大学出版会、1992年、pp.14-20。

<sup>16</sup> 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年、77頁「第二表 初期キリスト教系諸学校一覧表」より算出。



- ・頌栄女子学院『頌栄女子学院百年史』1984年。
- ・東京慈恵会医科大学『東京慈恵会医科大学 百年史』1980年。
- ・聖路加国際大学『聖路加看護大学五十年史』1970年。
- ・——『聖路加国際病院 八十年史』1982年。
- ・日本女子大学『日本女子大学学園事典 創立100年の軌跡』2001年。
- ・櫻蔭会編『桜蔭会史』1940年。
- ・渋谷良子・内田道子・山本芳美『ジャパニーズ・スカラーシップ 1893-1976の記録—日本最初の女性のための留学制度』ぶんしん出版、2015年。

(表1) 女子海外留学者、学歴、留学・渡航歴、地位

※空欄は不明、又は無し

氏名	渡航年	派遣機関	専攻分野	学歴	留学・渡航歴	初勤務先地位／組織における地位	帰国後勤務先地位
山川（大山）捨松	1871	開拓使、文部省	教養部		ヴァッサー・カレッジ教養部		
津田梅子	1871 1889	開拓使、文部省、 自主渡航	生物学、 教育学		アーチャー・イン ステイチュート、 プリンモア大学 (自主渡航)	華族女学校教師 (再渡航時)	華族女学校教師、 女子英学塾長
永井（瓜生）繁子	1871	開拓使	音楽		バツサー・カレッジ 音楽科		東京女子高等師範 学校兼東京音楽 学校
武田錦子	1879 1886	自主渡航、 文部省	普通師範科・ 幼稚園保育 科	東京女子師範 学校	セーラム師範学校、 ウェスタン女子大 学	学生、 東京女子師範学 校教師	東京女子師範学校 助教授
山下りん	1880	自主渡航	絵画	工部美術学校 中退	ペテルブルグ	その他	
岡見京子	1884	自主渡航	医学	横浜共立女学校	ペンシルバニア女 子医科大学M.D.	桜井女学校教員	慈恵病院産婦人科 主任
甲賀ふじ	1887	その他の機関	保育修業	神戸英和女学校	ケンブリッジ、 ボストン保母 伝習所	神戸女学院舎監	頌栄幼稚園保母、 広島英和女学校附 属保母養成科教師
那須セイ	1887	その他の機関	看護学	東京慈恵医院看 護婦教育所	セント・トーマス 病院看護婦学校	東京慈恵医院 看護婦	東京慈恵医院女室 看護長兼外来診察 場掛
拝志（林）よしね	1887	その他の機関	看護学	東京慈恵医院看 護婦教育所・女 子高等師範学校	セント・トーマス 病院看護婦学校	東京慈恵医院 看護婦	東京慈恵医院 看護婦
幸田延子	1889	文部省	音楽	文部省音楽取調 所（東京音楽学 校の前身）	ウィーン音楽院	音楽取調所 伝習生	東京音楽学校専修 部入学
森島（斉藤）美根	1889	自主渡航	幼児教育	東京下谷小学校	カリフォルニア 幼稚園訓練学校	二葉幼稚園設立 運営	横浜私立幼稚園 勤務
渡辺つね	1889	その他の機関	数学	神戸女学院	カールトン大学	神戸女学院教師	神戸女学院教師
森（堀内）静子	1889	その他の機関		神戸女学院	エバンストン（ノ ースウェスタン）大 学、 ラドクリフ・カレ ッジ	神戸女子手芸学 校英語教師	博覧会・展覧会・ 日本美術の展覧会 責任者
高橋瑞子	1890	自主渡航	医学	済生学舎	ベルリン大学 医学部聴講生	開業医	開業医
塚本不二子	1890	その他の機関	理科・歴史	神戸女学院	ウィルソン大学、 後ペンシルバニア 大学	頌栄女学校・神 戸女学院教師	神戸女学院・県立 御影師範講師
平田（宮川）敏子	1891	その他の機関	英文学	神戸女学院	マウント・ホリョ ーク大学	フェリス女学校 講師	神戸女学院英文学 講師
井深（大島・山脇）花	1891	その他の機関	理科・数学	神戸英和女学校	マウント・ホリョ ーク大学	鳥取英和女学校 英語教師	神戸女学院理化学 教授
中村安子	1891	自主渡航	歯科学	横浜仏和学校	ペンシルバニア 大学	横浜仏和学校手 芸教授	千葉に開業
雨夜久子	1892	その他の機関	理科・数学	神戸女学院	カルトン大学		帰国後 早逝
桜井ちか	1893	自主渡航	教育学	芳学舎	桜井女学校設立	桜井女塾設立	桜井女学校校長

氏名	渡航年	派遣機関	専攻分野	学歴	留学・渡航歴	初勤務先地位/ 組織における地位	帰国後勤務先地位
松田道	1895	津田梅子奨学金		同志社女学校、 フェリス和英女 学校	プリンマー大学、 再度、プリンマー 大学院		神戸女学院教師、 同志社女学校教 師、同校長
江頭秀	1895	その他の機関		神戸女学院入学	マウント・ホリョー ク・カレッジ		梅花女学校教頭 早逝
井上友子	1896	自主渡航	医学	長崎活水女学校	クリーブランド医科 大学、ミシガン大学	学習院女子部等 校医	東京で開業
安井てつ	1897	文部省、その他 の機関、自主渡 航	教育学及び 家政学	女子高等師範 学校	イギリス（ケンブ リッジ大学、オッ クスフォード大学）	東京女子高等師 範学校助教授	東京女子高等師範 学校教授兼舎監
幸田（安藤）こう	1899	文部省	バイオリン	東京音楽学校	ドイツ国立音楽院		東京音楽学校教授
井口（藤田）あぐり	1899	文部省	体操教授法 研究	女子高等師範 学校	ボストン体操師範 学校	女子高等師範学 校訓導	女子高等師範学校 教授
河井 道	1899	津田梅子奨学金	歴史、 経済学	北星女学校	プリンマー大学 B.A	女子（津田） 英学塾教頭	女子（津田）英学 塾・女子高等師範 学校教師
西川（山家）悦	1899	その他の機関		神戸女学院・ 高等科卒	ミズリー州ハワード ベイン・カレッジ		神戸女学院教師
三谷民子	1900	その他の機関		女子学院	アメリカ（ノース フィールド大学）、 イギリス（オック スフォード大学）	女子学院教師	女子学院教師
荒木いよ	1900	その他の機関	看護学	立教女学校、 神戸看病婦学校	リッチモンドの オールド・ドミニ オン病院、ジョン ズ・ホブキン病院	派出看護婦	聖路加病院看護婦
鈴木濱子	1900	その他の機関	洋服裁縫	不明		その他	
宮川（大江）スミ	1902	文部省	家政学	東洋英和女学校、 女子高等師範学 校	バケシーポリテ クニック、ベッド フォード大学	東洋英和女学校 教員	女子師範学校教諭 兼女子高等師範学 校教授
宇良田唯子	1903	自主渡航	眼科学	内務省医術開業 試験	マールブルク大学 M.D.	北里柴三郎研究 室助手	東京で開業・ 天津同仁病院長
長谷場（鎌原）政子	1904	自主渡航	教育、人文	梅花女学校	ミルス・カレッジ	民間団体責任者 （学会会長等）	
石原キク	1905	自主渡航	保育	東京保母伝習所	シンシナティ大学 師範科、ウエスト ン大学、コロンビ ア大学教育学部	広島女学校附属 幼稚園、キリス ト教保育	東京保母伝習所長
福井繁子	1905	自主渡航	産婦人科学	済生学舎	マールブルク大学 M.D.	緒方病院医院	大阪で開業
草間（永井）世良	1905	その他の機関	ドイツ語	神戸女学院 専門部	オベリン大学・ 大学院		甲南女学校、フラ ンスにて国際連盟 委員会で働く
吉岡（葛山）操	1905	その他の機関		神戸女学院・ 高等科卒	ノースウェスタン 大学、シカゴ大学		山陽高等女学校 教師
明山（中川）もと	1906	自主渡航	医学	同志社高等科中 退	ペンシルバニア 女子医科大学	その他	同志社経営博愛病 院勤務
星野あい	1906	津田梅子奨学金	生物学	フェリス英和女学 校、女子英学塾	プリンマー大学	静岡英和女学校 教師	女子英学塾教師
山田千代子	1906	その他の機関	英語及び 音楽	共立女学校		英和女学校教師	挿真女学校教師
山田（川島）よし	1906	自主渡航	教育・ 人文系	梅花女学校	シモンズ・カレッジ	梅花女学校教師	梅花女学校教師
曾根（相沢）みさほ	1906	自主渡航	医学	尚綱女学校、 同志社高等部	ペンシルバニア女 子医科大学	その他	同志社経営博愛病 院勤務
神戸絢子	1906	文部省	ピアノ	東京音楽学校	バリ音楽院	東京音楽学校 助教授	東京音楽学校 助教授
城戸順子	1907	自主渡航	宗教学	共立女学校	ダクタホワト神学校 （ニューヨーク）	共立神学校秘書	共立神学校講師

氏名	渡航年	派遣機関	専攻分野	学歴	留学・渡航歴	初勤務先地位／組織における地位	帰国後勤務先地位
辻（小此木）マツ	1907	文部省	英語、英文学	女子高等師範学校、女子英学塾選科	ウェルズレー大学、オックスフォード大学		東京女子師範学校附属高等女学校教諭
萩原タケ	1907	その他の機関	看護学	日本赤十字社看護婦養成所	ヨーロッパ視察	日本赤十字社病院看護婦	日本赤十字社看護婦監督
原口鶴子	1907	自主渡航	心理学	日本女子大学校大学部	コロンビア大学 Ph.D	その他	
井上秀	1908	その他の機関	家政学	日本女子大学校	コロンビア大学、シカゴ大学	日本女子大学校附属高等女学校教諭	日本女子大学家政学教授
一柳満喜子	1908	津田梅子奨学金		神戸女学院・音楽部卒	プリンマー大学		近江兄弟社学園長・ヴォーリス夫人
植村 環	1911	自主渡航	人文系・宗教学	女子学院	ウェルズレー大学、ニューカレッジ	民間団体責任者（学会会長など）	女子（津田）英学塾教師
上代タノ	1911	その他の機関	英文学	日本女子大学校英文科	ウェルズ女子大学	日本女子大学校予科英語教師	日本女子大学校教授
山本（広中）ツチ	1912	自主渡航		女子学院高等部	ビプリカルセミナー（ニューヨーク）	光城女学院（山口）教師	梅光女学院（下関）教師
二階堂トクヨ	1912	文部省	体操	（東京）女子高等師範学校文科卒	キングスフィールド体操専門学校	東京女子高等師範学校助教授	東京女子高等師範学校教授
小倉 末	1912	文部省	音楽	神戸女学院・東京音楽学校	ベルリン王立音楽学校		東京音楽学校教授

※表中「その他の機関」とは、官立以外の女子教育機関を表す。

この（表1）によれば、渡航年でいえば1870年代の国費留学は山川（大山）捨松、津田梅子、永井（瓜生）繁子らの北海道開拓使が派遣した少女留学生と、1879（明治12）年に文部省がアメリカのセーラム師範学校で幼児教育と保育を学ばせるために派遣した東京女子師範学校卒業生の加藤（武田）錦子のみであった。

しかし、1880年代になると、医師資格取得や看護学の修得のために海外の医科大学へ自主留学するパイオニア女性たちが現れる。また、神戸英和女学校（神戸女学院）がその卒業生の第1回生から、母校の教員養成を目的としてアメリカの女子カレッジに卒業生を送るようになった。さらに、文部省からはウィーンへの音楽留学が、自主渡航としては美術留学や幼児教育が見られる。1890年代になると、文部省では女子高等師範学校の教育の改革が始まり、家政学や体育学の教育法の修得のためにアメリカに、そして東京音楽学校からはドイツへの音楽留学が行われたように、わが国の女子教育の充実を企図して各学校ごとに、その卒業生を派遣することが本格化してくるのである。そして1900年以降では、女子英学塾（現、津田塾大学）、日本女子大学校（現、日本女子大

学）などの女子高等教育機関が創設され、それぞれが後継者育成のために、海外派遣留学が行われるようになった。例えば津田梅子は女子英学塾の創設以前の1885（明治28）年に、日本女性をアメリカに留学させるための奨学金制度を設立して、松田道、河井道などを、彼女の母校であるプリンマー・カレッジに送っている。また神戸女学院では、アメリカの女子カレッジと姉妹校あるいは連携関係での奨学金を準備して、順次、卒業生を送り出すようになった。<sup>17</sup>（表1）によれば、留学生の出身学校には神戸女学院のほかに、長崎活水女学校、梅花女学校、北星女学校、フェリス女学校、女子学院、同志社女学校、立教女学校、横浜共立女学校、横浜仏和女学校の学校名がみられるが、いずれもキリスト教主義の女学校である。また、キリスト教主義を学校の理念に掲げてはいないものの、津田梅子はフレンド派のキリスト教信者でクウェーカ教徒であったし、日本女子大学校創設者の成瀬仁蔵もまたアメリカ留学で牧師の資格を取得し、帰国して牧師となり同時に教師でもあった。したがって、両大学の教職員や関係者にはキリスト教徒が多かったが、それは、当時の欧米の大学やカレッジでは一般的であっ

<sup>17</sup> 佐々木啓子は以下の論文において、戦前期の女子留学生の動向をその時代の社会状況や女子教育の発展過程をふまえて、さらに1920年代以降も含めて、4つのstageとして区分をし、第1stageは欧化主義の時代、第2stageは西洋的な知識移入、第3stageは女子高等教育拡充のため、第4stageは第一次世界大戦後の国際的な動向と女性の社会活動、として論じたが、本論ではこのstage論の区分は用いていない。

Keiko Sasaki, Yuri Uchiyama, and Sayaka Nakagomi, *Study Abroad and Transnational Experience of Japanese Women 1860s–1920s: Four Stages of Female Study Abroad*, Sumi Miyakawa and Tano Jōdai., *Espacio, Tiempo y Educación* SPECIAL ISSUE 2: Higher education in Asia, 2019. September. accepted. in 2020 to be published.

た。<sup>18</sup>次節ではわが国の女子ミッション・スクール、なかでも早期から女子の高等教育を志向した神戸女学院の教育と卒業生の留学動向を事例として論じよう。

### 3. 神戸女学院の教育課程について

神戸女学院は、アメリカのニューイングランドにおけるピューリタニズムの系統から結成されたアメリカ最初の外国伝道会、アメリカン・ボード（The American Board of Commissioners for Foreign Missions—ABCFM）から派遣された宣教師たちによって1875（明治8）年に設立された。<sup>19</sup>設立時の婦人宣教師、タルカット女史とダッドレー女史はキリスト教に基づく宗教教育を実現するために「ホーム」と称する寄宿舎で女子生徒たちと生活をともにするホーム教育を基本とした。

その後、アメリカンボードが派遣したバロウズ女史、そしてクラークソン女史はアメリカの名門女子セミナリーであるマウント・ホリヨーク・セミナリーで学んだ。1879（明治12）年にクラークソン女史が校長に就任してより学科課程の改革が行われた。それはクラークソン女史がアメリカで教職に就いた経験をもっていて、女子教育については「高度の知的教育」が必要であるという信念のもとに、特に日本の女性に欠如していた「自然科学教育」の必要性を唱え、物理と化学が講じられることとなった。<sup>20</sup>当時、日本では義務教育年限が4年間であったが、同校ではそれ以降の女子に5年間の課程を設定した。校名は「神戸英和女学校」と改称され、私塾的な要素が払拭された。

新課程では、国語と漢文、そして代数・英文法・植物学・英作文・地理・歴史が英語で講じられ、最上級生にはクラークソン女史が自然科学（Natural Philosophy）と幾何学を講じた。<sup>21</sup>1879（明治12）年－1882（明治15）年まで第2代校長を務めたクラークソン女史は、神戸英和女学校のレベルを高め、アメリカのカレッジにみられるリベラル・アーツ教育を導入した。そのルーツとなったのが、アメリカで最も伝統的な女子大学であるマウント・ホリヨーク・セミナリー（後、カレッジ）であった。同女子大学があるマサチューセッツ州のサウス・ハドレーの近くには、新島襄、内村鑑三、札幌農学校初代校長のク

ラーク博士を輩出したリベラル・アーツ・カレッジのアーモスト・カレッジや、アメリカの名門女子大学群、セブン・シスターズのうち、スミス・カレッジとウェルズレー・カレッジが存在している。アメリカのリベラル・アーツ教育が神戸女学院に導入されたのであった。<sup>22</sup>

#### 3-1. 神戸女学院からのアメリカ留学

留学生のプロフィールは、『神戸女学院百年史 各論』において岡本道雄が卒業生を詳細に調査してまとめ、表として記載している。<sup>23</sup>

それによれば、1882（明治15）年に初の卒業生が12名出た。その大多数が母校で後進の育成にあたったが、数年後には彼女らはさらに岡山、鳥取、松山、熊本などの女学校教師として赴いた。そして1887（明治20）年ごろからは、卒業生がアメリカに留学したことが見てとることができる。卒業回数ごとに述べるならば、第1回卒業生（1882年卒）では平田（宮川）としがマウント・ホリヨーク・カレッジに留学、帰国後は英語教師となる。甲賀ふじはアメリカのケンブリッジおよびボストンの保母伝習所で学び、日本の保育教育のパイオニアとなった。渡邊常はカールトン・カレッジ卒業、帰国後は神戸女学院教師、その他の女学校で数学、物理、化学を教えた。第2回卒業生（1884年卒）では雨夜ひさが、カールトン・カレッジに留学した。第4回卒業生（1886年卒）塚本ふじは、ペンシルヴァニア州ウィルソン大学及びペンシルヴァニア大学大学院（生物学）に留学し、帰国後は神戸女学院や兵庫県立第一高等女学校で英語を教えた。第6回卒業生（1889年）の井深（大島）花は、マウント・ホリヨーク・カレッジに留学（数学・自然科学）し、神戸女学院や東京の女子学院、東洋英和女学校などで数学、物理、化学を教えた。堀内（森）しづは、ノース・ウェスタン大学、ラドクリフ・カレッジへ留学し、在米中にシカゴ万国博覧会での日本婦人代表を務め、その後、国内外での各種美術展覧会で責任者となった。<sup>24</sup>

このように、神戸女学院では日本における女子高等教育が未発達な段階において、また日本の教員養成が初等教員養成に留まっていた時代において、1880年代からその卒業生をアメリカに留学させ、母校や他の女子教育機関の中等教員養成の任を担っていたことは特筆に価す

<sup>18</sup> 津田梅子が留学したアメリカの名門女子大学である、プリンマー女子大学、そして後述の岡見京が留学したペンシルヴァニア女子医科大学はフィラデルフィアのクウェーカ教徒らがクウェーカの女性のために創設した高等教育機関である。イギリスでも高等教育と宗教はオックスフォード大学やケンブリッジ大学に女性が教育機会を求める際には、先ずは宗教的な観点からの議論がなされたのであった。参考：山口みどり「英国国教会とその娘たち」香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育』、昭和堂、2008年、227-253頁。

<sup>19</sup> 『神戸女学院百年史 各論』1981年、6-7頁。

<sup>20</sup> 『神戸女学院百年史 総説』、66頁。

<sup>21</sup> 同上、65頁。

<sup>22</sup> 『神戸女学院百年史 各論』、1981年、176-177頁。

<sup>23</sup> 同上、205-222頁。

<sup>24</sup> 以上、同上、205-213頁より。



る。なお、アメリカでいうリベラル・アーツ教育は単なる教養教育のみならず、リベラル・アーツを基礎とした教員養成の機能をもっていたのであり、さらにカレッジを視野に入れた教員養成を企図していたのである。まさに神戸女学院は明治初期の日本の女子教育において、師範教育ではなく教養教育を基礎として、英語のみならず、数学、物理、化学など、自然科学と人文社会科目の両面での女子教員養成に寄与したといえる。

### 3-2. 神戸女学院における教員養成とカレッジ構想

こうした学校組織の確立とともに、神戸女学院ではカレッジ計画が本格化する。すでに第2代校長のクラークソン女史が構想していたことではあったが、1890（明治23）年に高等科を設置したことにより、わが国において女子の高等教育機関を目指すことを明確に示した。カレッジ構想のモデルとなったのがアメリカの女子大学であった。前述のように、神戸女学院には開校時より、アメリカの女子セミナリー、特にマウント・ホリヨーク・セミナリー出身者の中から、多くの女性がアメリカ伝道士会より派遣されていた。

マウント・ホリヨーク・セミナリーの創設者であるメアリー・ライアンは、その教育目的の一つに、教師の養成を掲げ、カリキュラムを男子のカレッジと同じとし、リベラル・アーツの理念に基づいて知力と思考力の発達を目指した。一方で、メアリー・ライアンはドメスティック（家庭的）なものを否定せずに、よき妻、よき母を育て、女性のための高等教育を求めたのであった。また、「教養のあるクリスチャン・ワーカー」を育てることをマウント・ホリヨークの目的の一つとし、また、世界的な宣教活動にも関心を持っており、アメリカン・ボードの大会などにも参加していた。<sup>25</sup>

こうした教育理念は、神戸女学院のクラークソン女史以降の校長にも受け継がれていた。ブラウン女史は、カールトン・カレッジ（アメリカでオバリン・カレッジに次いで共学大学になった）の出身であり、ソール院長はウェルズリー女子大学、デフォルト女史はスミス女子大学、ホルブルック女史はマウント・ホリヨーク・セミナリーの出身である。マウント・ホリヨーク出身で神戸女学院の教師となった女性は、戦前期で19名であった。<sup>26</sup> また、マウント・ホリヨーク卒業後に婦人宣教師となって国外に出た女性は、創立から100年後の1937年まで386名であり、そのうち47名が日本に来了。<sup>27</sup>

### 3-3. 神戸女学院のアメリカでの募金活動と国際交流事業

第一次世界大戦後に生徒数が激増した神戸女学院では、大学部設置を見据えての募金活動が展開され、アメリカではデフォルト院長の帰米を機に1920（大正9）年にシカゴで「在米神戸女学院財団（Kobe College Corporation）」が組織された。この組織を通して神戸女学院はアメリカとの関係をさらに強くしていく。<sup>28</sup> さらに、神戸女学院ではアメリカに3つの姉妹校をもつことになった。1925（大正14）年にはラドクリフ・カレッジとレイク・イリー・カレッジが同校の姉妹校となった。また、ロックフォード・カレッジとは1921（大正10）年から姉妹関係が始まった。<sup>29</sup> そして1930（昭和5）年に「在米神戸女学院財団」に新たに設置された「フレンズ・オブ・コーベ」の奨学金によって、1937（昭和12）年から1941（昭和16）年までに、アメリカの大学から7名の女子留学生が来日し、そして神戸女学院からは5名が、姉妹校のマウント・ホリヨーク・カレッジなどに交換留学生として渡った。それ以外にも、私費での留学生は（表1「自主渡航」）にみられるように、この期間を通してアメリカの大学で学んでいることがわかる。

#### 甲賀ふじ（1857-1937）

兵庫県三田藩出身。藩主九鬼隆義の勧めで、16歳で宣教師ディービスの家族と住み、タルカット、ダッドレー両女史来日後は、その授業に出席して伝道の助手を務めた。神戸英和女学校の舎監となり（1879-1886）、1887（明治20）年にアメリカのケンブリッジとボストンの保母伝習所に留学した。1889（明治22）年に帰国して頌栄幼稚園保母となるが、広島英和女学校創立者のゲーンズ女史の勧誘により、同附属保母養成科教師、同幼稚園主任保母（1891年）となり、その後、ホノルル幼稚園で働く。帰国後、日本女子大学校附属豊明幼稚園、さらに森村幼稚園初代主事を務めた。<sup>30</sup>

#### 平田（宮川）とし（1866-不明）

宣教師ジョン・T. ギョーリックの養女となり、その後、宮川経輝牧師の養女となる。1882（明治15）年、卒業後に神戸英和学校（神戸女学院の前身）で教師となる。さらに横浜フェリス和英女学校で教鞭をとりつつ勉強をする。1891（明治24）年、マウント・ホリヨーク・カレッジに留学。帰国後も母校で教鞭をとり（英語、歴史）、

<sup>25</sup> 前掲、『神戸女学院百年史 各論』、249-253頁。

<sup>26</sup> 同上、255-256頁。

<sup>27</sup> 同上、253頁。

<sup>28</sup> 同上、289-298頁。

<sup>29</sup> 同上、299-300頁。

<sup>30</sup> 同上、206頁。及び前掲『日本基督教歴史大事典』500頁。津上智実『山本通時代の神戸女学院』日本キリスト教団出版局、2015年、71頁。



文部省中等教員検定試験（英語）のわが国初的女子合格者となる。その後、神奈川県立横浜高等女学校（後、神奈川県立第一高等女学校）で教鞭をとる。<sup>31</sup>

#### 井深（大島）花（1865-1945）

岡山の貧しい士族の家庭に育ち、親戚の信徒からの感化を受けて1884（明治17）年に神戸和英女学校（神戸女学院）に入学、1889（明治22）年に卒業し、鳥取英和女学校の英語教師となる。1891（明治24）年にマウント・ホリヨーク・カレッジに留学。帰国後1895（明治28）年に神戸女学院理化学教授となる。1899（明治32）年、明治学院総理の井深梶之助と結婚。1900（明治33）－1931（昭和6）年まで女子学院で数学、物理、化学を教え、東洋英和女学校（東洋英和女学院）でも教鞭をとった。日本基督教婦人矯風会常置委員、神戸女学院理事、東京女子大学理事、YWCA同盟委員長などを歴任した。<sup>32</sup>

### 4. 横浜・築地外国人居留地における 医療ミSSIONナリーと女子留学

（表1）の女子留學生のなかで顕著なのが、医学・医療系留學生の存在である。一つには、海外の大学でメディカル・ドクター（M.D.）の資格を取得しようとした女性たち、いまひとつには、当時の日本では十分な専門的教育が受けられなかった看護師たちの海外派遣、あるいは留学であった。

#### 4-1. 留学による医師資格の取得

このうち海外の大学でM.D.の資格を取得した女性たちについては、小川眞里子による詳細な調査報告がある。また、石原あえかはドイツに医学修得のために留学した留學生たちの記録を丹念に収集して、その日独交流の歴史ある側面を明らかにしている。（後述）

日本の女性が海外でM.D.の資格を取得した背景としては、明治初期には、女性には医術開業試験の機会が閉

ざされていたことである。<sup>33</sup>女性医師第1号の荻野銀子の努力によって受験資格は与えられたものの、医学校が女性に門戸をとどしたため、外国の大学医学部を目指すことになったのである。当時の日本では医師資格を得るには、次の3つの条件のうちのいずれかを満たすこととされていた。1. 日本の大学の医学部を卒業すること。2. 認可外の医学専門学校で医学の知識と技術を習得して内務省医術開業試験に合格すること。3. 欧米のカレッジあるいは大学の医学部を卒業すること。<sup>34</sup>岡見が医師資格を目指していた頃は、1. 2. が女性に閉ざされており、見通しが立たない状況であったことから、3. の海外の大学などで医学を修めてM.D.の資格を取得することが、比較的確実な方法であったと思われる。<sup>35</sup>

実はこうした状況は日本に限ったことではなかった。イギリスでは、1858年に制定された医事法によって医業の専門職化が確立したが、女性はその対象から除外された。<sup>36</sup>エリザベス・ブラックウェル（Elizabeth Blackwell、1821 - 1910）は、イギリス生まれで、ニューヨークのジニーヴァ医科大学（Geneva Medical College）に入学を認められ、1849年に学位を得た。上記のイギリスの「医事法」によれば、1858年以前に外国で学位を取得した場合は、治療を行った実績をもって医師の医療委員会への登録が可能となったので、ブラックウェルは女性が医療活動ができるフランスに行って治療実績を積み、帰国して1859年1月にイギリスで最初の女性医師として登録された。1874年には、ジェックス・ブレイクなどエディンバラ大学を追われた女性たちの手でロンドン女子医学校が設立され、女性が医学を学ぶ機会が開かれたが、有資格医師の要件獲得にはさらなる闘いが必要とされた。<sup>37</sup>アメリカではすでに1850年にペンシルバニア女子医科大学が設立され、イギリスでの医師養成にも影響を与えた。アメリカにおける女性医師の養成と実践はブラックウェルによってイギリスに紹介されイギリスの女性たちに刺激を与えた。<sup>38</sup>こうしたイギリスでの状況やアメリカでの女子医科大学の設立は日本の女性の医学教育と医師資格制度のあり方と共通するものがあつた。す

<sup>31</sup> 前掲（1981年）、205頁。前掲（2015年）、69-70頁。手塚晃・国立教育会館編『幕末明治 海外渡航者総覧 第1巻』1988年、柏書房、257頁。

<sup>32</sup> 同上（1981年）、213頁。同上（2015年）、70頁。同上（1988年）、130頁。

<sup>33</sup> 明治期に女性が医学を学び医師の資格を取得して開業するのがいかに困難であったかについては、以下に詳しい。Mara Patessio and Mariko Ogawa, *To Become a Woman Doctor in Early Meiji Japan (1868-1890): Women's Struggles and Ambitions*, "Historia Scirntiarum" Vol.15-2, 2005, 159-176. また、1900（明治33）年に東京女医学校（現、東京女子医科大学）を創設した吉岡弥生に関する多数の伝記にも詳しく述べられている。

<sup>34</sup> 近代日本における医制の成立過程については、橋本鉦市『専門職養成の日本的構造』玉川大学出版部、2009年を参照。

<sup>35</sup> 海外で医学博士号を取得した女医については、三崎裕子『明治女医の基礎資料』日本医史学雑誌、第54巻第3号、2008年、281-292頁に詳しい。

<sup>36</sup> 香川せつ子『『女性プロフェッション』としての医業と医学教育』、香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育』昭和堂、2008年。255-256頁。

<sup>37</sup> 香川せつ子『女性と医学教育—19～20世紀初頭英国文献集 別冊日本語解説』、エディション・シナプス、2014年、6頁。

<sup>38</sup> 同上、14頁、16頁。

なわち女性の医学教育と職業資格制度の発展はトランスナショナルな展開をしているのであった。そこで本節では、明治期に海外でメディカル・ドクターの資格を取得して帰国後に医師として登録した女性として、岡見京と宇良田唯子について述べよう。

### 岡見（西田）京（1859-1941）

日本女性初の海外の医学大学でのメディカル・ドクター取得者で、日本における公式の医籍登録者である岡見（西田）京は、青森県の南部藩の商家に生まれた。但し、父方はもと南部藩の士族であり、母は陸中水野藩の士族であったこともあり<sup>39</sup>京は江戸水野藩邸で過ごすことが多かった。1867（慶応3）年に、一家は貿易商を営むために上京して京橋に移住し、横浜にも居を構えた。貿易商であったためか、京は英語の勉強に興味をもったらしい。1873（明治6）年に京は長老派ミッション・スクールである横浜共立女学校に入学した。この学校の教師に婦人宣教師のツルー夫人がいた。京は卒業後に官立の東京女学校で2年間学んだ後、1881（明治14）年、東京築地の桜井女学校の英語教師となった。日本でのミッションリーによる看護学校の設立を訴えるためにアメリカで講演活動をしていた婦人宣教師のバラ夫人が急死し、その意志を継いでツルー夫人は桜井女学校内に看護婦学校を創設した。<sup>40</sup>

1885（明治17）年に京はクリスチャンで絵画教師をしていた岡見千吉郎と結婚した。この岡見家は裕福なクリスチャンの家庭で頌栄女学校を設立した教育一族であった。千吉郎は他の兄弟とともにアメリカに留学し、京もまた宣教医師を目指して渡米した。フィラデルフィアに到着し、フレンド派のクェーカー教徒で親日家の富豪であったモリス家に寄宿して、ペンシルバニア女子医科大学に入学した。<sup>41</sup>

この女子医科大学はクウェーカー教徒によって1850年に設立された世界初の女子医科大学であった。当時の学長であったレイチェル・ボドレー（Rachel Bodley）が、医療伝道事業に関心をもって、アジアや中東諸国からの女子学生を積極的に受け入れていた。岡見京とインドからの留学生、イランからの留学生と一緒に写っている写真がある。近隣には北米で最初に医学部が設置され

たペンシルバニア大学があった。<sup>42</sup>

1889（明治22）年3月、京は同医科大学を卒業し医学博士学位（M.D.）を取得した。9月に帰国して慈恵医院の婦人科主任となったが、1892（明治25）年に慈恵医院を退職して自宅で開業した。1893（明治26）年、ツルー夫人に協力して療養型医療施設「衛生園」を設立するも経営が思わしくなく、1906（明治39）年に閉鎖した。<sup>43</sup>その後は岡見家の教育事業であった頌栄女学校教頭、頌栄幼稚園長の職に就いて教育に携わった。

### 宇良田唯子（1873-1935）

1873（明治6）年、宇良田唯子は熊本県天草市牛深の非常に裕福な「銀主」（大名調達金融業）の末娘として生まれた。父親は薩摩藩の武士と交流があり、また啓蒙思想家として文筆活動も行っていた。1890（明治23）年に唯子は私立熊本薬学校に入学し、2年間の在学期間を経て卒業し、その1ヶ月後に大阪で行われた内務省薬剤師試験の筆記試験と実地試験に合格した。<sup>44</sup>しかし、それに満足せずに医師を目指して上京し、済生学舎（医学を学ぶための各種学校）に入学し、短期間で前期試験および後期試験に合格して1899（明治32）年には医籍登録をされた。<sup>45</sup>しかし開業することなく、同郷の北里柴三郎の国立伝染病研究所に入所して、2年間、助手として修行を続けた。そして1903（明治36）年にドイツ留学のために出発した。

しかし目指したベルリン大学では女性のM.D.取得は不可能であったので、マールブルク大学に変更した。海外で医学を学んだ女性に対して、ドイツ国内における医学・歯科学・薬学の国家試験受験資格が認められたのが1900年であった。<sup>46</sup>日本の済生学舎で学び、医術開業試験に合格して医籍登録者であった宇良田唯子は、この条件によってマールブルク大学医学部聴講生資格を得て、M.D.の資格試験に合格した。宇良田唯子はマールブルク大学では女性で初のM.D.取得者となった。1906（明治39）年、帰国後は故郷の熊本で眼科医を開業するが、やがて中央から呼ばれて東京で開業し、北里の勧めもあり、女性の活動が制限される日本よりも天津の日本租界での病院長として活躍した。<sup>47</sup>

<sup>39</sup> 堀田国元『ディスカバー岡見京』堀田国元出版、2016年。頌栄女子学院『頌栄女子学院百年史』1984年、171-180頁。松田誠『高木兼寛の医学』東京慈恵会医科大学、2007年、610-623頁。

<sup>40</sup> 堀田国元、23-24頁。

<sup>41</sup> 同上、29頁。

<sup>42</sup> 同上、29-30頁。

<sup>43</sup> 同上、132頁、年表より。及び、亀山美知子『女たちの約束—M.T. ツルーと日本最初の看護婦学校』人文書院、1990年、271-297頁。

<sup>44</sup> 石原あえか『ドクトルたちの奮闘記』慶應義塾大学出版会、2012年、182-184頁。

<sup>45</sup> 前掲、三崎裕子、2008年、284頁。

<sup>46</sup> 前掲、石原あえか（2012年）、194頁。

<sup>47</sup> 同上、212-214頁。前掲、手塚晃・国立教育会館編（1992年）、柏書房、257頁。

#### 4-2. 看護婦養成と海外留学：慈恵会医院の事例

看護教育についていえば、日本における看護婦養成は非常に遅れていた。日本の看護学校や看護教育を欧米並みに充実させようとする婦人宣教師ツルー夫人の働きかけもあったが、アメリカ伝道師会からの資金援助は得られず、その実現は困難であった。

日本における看護教育を早期に実現した病院は、1885（明治18）年に看護婦養成所を設立した有志共立東京病院（慈恵会医科大学病院の前身）であった。その設立者である高木兼寛は、かつてイギリスのセント・トーマス病院医学校に留学（1872年）した時に、同大のナイチンゲール看護学校を見聞し、帰国後に同志社の新島襄（1843-1890）と、桜井女学校のアメリカ婦人宣教師のミセス・ツルー（Mary, T.true, 1841-1896）と呼応して、ナイチンゲール方式による看護学校（Trained Nurse の養成）をそれぞれ設立した。<sup>48</sup>

1884（明治17）年に高木兼寛は有志共立東京病院看護婦教育所を、1886（明治19）年には同志社に京都看病婦学校と桜井女学校の看護婦養成所が開設された。<sup>49</sup>高木はアメリカ宣教看護婦のミス・リード（M.E.Reade）を招聘した。リードは築地居留地に設立された女子ミッション・スクールである新栄女学校（後に桜井女学校と合併して今日の女子学院となる）の音楽教師であり、同じく宣教医師であったヘボン博士（J.C.Hepburn.1815-1911）と親交があった。リードはアメリカでナイチンゲール式の看護教育を受けアメリカ長老派伝道司会（American Presbyterian Mission）に所属していた。リードはその交換条件としてキリスト教の布教を要請し認められたため、13名の生徒の多数がキリスト教者となった。<sup>50</sup>高木もまたイギリスのナイチンゲール看護学校において、キリスト教がその思想的基盤をなしていることを実感していた。リードが退任して後、高木は慈恵医院の二人の看護婦をイギリスに留学させた。

#### 那須せい・拝志（林）よしね

那須せいと拝志（林）よしねは、わが国初の看護婦留学生である。かつて高木が学んだイギリスのセント・トーマス病院のナイチンゲール看護学校へ、看護法の研究のために1887（明治20）年に渡英し、2年間の勉学を終えて1889年に帰国した。二人はその後、慈恵会病院に

て看護婦教育所の生徒教育掛として活躍した。<sup>51</sup>

#### 4-3. 聖路加病院と看護婦養成：

##### アメリカ聖公会の宣教医師、トイスラーの業績

アメリカ聖公会では明治初期の来日以来、医療事業に力を注いだが、成果は芳しいものではなかった。しかし、トイスラーが4番目の宣教医師として1900（明治33）年に横浜港から東京に到着してより、状況は少しずつ好転していった。築地病院から聖路加病院と、そこでの看護領域を担ったのが荒木いよであった。聖路加病院の看護教育の充実が病院の発展とも大きく関わっていた。

##### 荒木いよ（1877-1969）

荒木いよは1877（明治10）年、東京に生まれた。1895（明治28）年に立教女学校を卒業し、神戸のカナダ・ミッシヨナリー経営の看護学校に入学した。ミス・スミスから看護学と医学を2年間学び、その後、神戸のドクター・マクドナルドの病院で臨床看護を修めて東京に戻り、外国人患者の家庭看護婦として働いた。<sup>52</sup>荒木は、そこに往診にきていたトイスラーに見出されたのであった。当時、トイスラーは主として外国人患者を往診していたが、宣教師ミス・マンを往診した際に、英語が堪能でできばきと看護する荒木いよを見出し、有能な女性であるので、バージニアのリッチモンドにあるオールド・ドミニオン病院で勉強することを勧めた。後に、ミス・マンが保養のためにアメリカに帰国する際に、荒木いよがミス・マンの付添看護婦として同行渡米することとなった。<sup>53</sup>

1902（明治35）年、築地病院は聖路加病院として発足、院長はトイスラーであった。このときまでに、荒木いよは留学を終えて帰国しており、トイスラーは荒木を看護婦長に任命した。<sup>54</sup>

1904（明治37）年に聖路加看護学校が発足し、荒木婦長によって、アメリカ流の修業年限2年の系統だった看護教育が始まった。この時の生徒8名は全てミッション・スクールの卒業生でほとんどクリスチャンであった。<sup>55</sup>以降、聖路加病院は各界からの後援を得て拡張し、1917（大正6）年には聖路加国際病院と改称し、看護婦教育も充実していった。

関東大震災によって病院建物が崩壊したため、トイスラー院長はアメリカ赤十字社、聖公会本部、ロックフェ

<sup>48</sup> 前掲、松田誠（2007年）、905-906頁。

<sup>49</sup> 同上、906頁。

<sup>50</sup> 同上、907-908頁。

<sup>51</sup> 同上、912-913頁。

<sup>52</sup> 聖路加国際病院『聖路加国際病院八十年史』、1982年、6頁。

<sup>53</sup> 同上、1-6頁。

<sup>54</sup> 同上、7頁。

<sup>55</sup> 同上、7頁。



ラー財団に関東大震災災害救護と病院復興の援助を求め、ロックフェラー財団は公衆衛生指導者養成への協力を申し出た。<sup>56</sup>以降、聖路加国際病院は公衆衛生看護にも尽力して日本の公衆衛生教育を推進していくことになった。

1927(昭和2)年、荒木いよ看護婦長はアメリカの看護師養成機関を視察した。そして新井キク、湯楨ます、安藤雅恵らの看護婦が、ロックフェラー財団の奨学金を得て渡米した。<sup>57</sup>聖路加国際病院からのこの奨学金によるアメリカ留学はその後、第二次世界大戦前まで続くことになった。<sup>58</sup>

## まとめ

本論では明治期に海外に留学した女性、55名について、その留学目的と留学にいたる経緯、留学先での勉強などを派遣機関ごとに辿り、留学によって女性たちが、帰国後にどのようなキャリアを形成したかを一覧表にまとめた。明治初期の日本では政府による女子教育は立ち遅れ、アメリカの伝道師会などが派遣した宣教師たち、特に婦人宣教師たちが教会付設の女子ミッション・スクールを設立して日本の女子教育を担った。明治初期にアメリカ伝道師会から日本に派遣された多くの宣教師たちが、横浜、築地、神戸などの外国人居留地(foreign settlements)を中心として、特に女子のためのミッション・スクールを設立し、キリスト教の伝道事業以上に女子教育事業に力を注いだ。

こうした女子ミッション・スクールでは、婦人宣教師が中心となって、キリスト教主義の教育をおこなうと同時に、例えば神戸女学院などでは英語教育、音楽教育、自然科学教育に力を入れ、女性の高等教育進学や海外の大学への留学を推進した。留学生たちは帰国後には母校および他のミッション・スクールの教師となり、さらには高等教育機関の教授として活躍する女性も少なくなかった。

一方で、女性が正規の医学教育を受けられず、医師開業資格を取得できなかった明治前半期に、海外の大学でのメディカル・ドクターの取得を求めて、アメリカあるいはドイツに留学する女性たちもいた。さらに看護の領域では、欧米並みの看護を実現するための海外留学が、慈恵会病院や聖路加病院など民間の病院主導で行われた。そこでも顕著なのは、ミッションナリーの存在であった。海外伝道において、布教のための学校建設とともに重要視されていたのは医療伝道であり、その日本における実現は彼らの使命でもあった。

明治初期の日本では、女性に対する公費留学が極め

て限定されていたなかでは、裕福な家庭の女性たちのみ、財力のある父親や夫の支援によって私費留学が可能であった。家族からの支援が得られない場合は、個人的なネットワーク、なかでもキリスト教伝道師会のネットワークによって留学する者が少なくなかった。

また、日本における看護教育は、国がそのための教育機関を設立したわけではなく、各病院が附属の看護学校を設立して対応していたが、慈恵会病院や聖路加病院などは、機関ごとに看護婦を海外の看護学校や医療関係の学校に派遣留学をさせて看護技術を習得させていた。こうした看護婦の中にはミッション・スクール出身者あるいはキリスト教会に所属しているものが少なくなかった。

このように、女性たちは自国の教育制度、あるいは専門職資格制度の障壁を乗り越えるために、女性を受け入れてくれる外国の大学での資格を取得しようとしたが、こうした女性たちのトランスナショナルな移動は、19世紀末から20世紀初頭のヨーロッパやアメリカの女性たち、そして日本の女子留学生にも共通に認められた現象であった。

## acknowledgement

\* 本論文には科学研究費補助金研究「女子高等教育のトランスナショナルな交流とネットワーク構築に関する歴史的研究」(課題番号18K02323)の成果の一部が含まれる。

## 【参考文献】

- ・石附実『近代日本の海外留学史』中央公論社、1992年。
- ・石原あえか『ドクトルたちの奮闘記』、慶應義塾大学出版会、2012年。
- ・井上高聡「開拓使仮学校の設立経緯」『北海道大学大学文書館年報』第3号、2008年。
- ・Eckhardt Fuchs & Eugenia Roldán Vera eds., *The Transnational in the History of Education: Concept and Perspective*, Palgrave Macmillan; 1st ed. 2019.
- ・香川せつ子『『女性プロフェッション』としての医業と医学教育』、香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育』昭和堂、2008年、255-256頁。
- ・——『女性と医学教育—19～20世紀初頭英国文献集別冊日本語解説』、エディション・シナプス、2014年。
- ・亀山美知子『女たちの約束—M.T. ツルーと日本最初の看護婦学校』人文書院、1990年。
- ・神戸女学院『神戸女学院 百年史 総説』、1976年。
- ・神戸女学院『神戸女学院 百年史 各論』、1981年。
- ・小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師—来日の背景とその影響』東京大学出版会、1992年。

<sup>56</sup> 前掲(1982年)、巻末年表、321頁。

<sup>57</sup> 同上、巻末年表、321頁。

<sup>58</sup> 聖路加看護大学『聖路加看護大学五十年史』、1970年、より。

- Keiko Sasaki, Yuri Uchiyama, and Sayaka Nakagomi, *Study Abroad and Transnational Experience of Japanese Women 1860s-1920s: Four Stages of Female Study Abroad, Sumi Miyakawa and Tano Jōdai.*, “Espacio, Tiempo y Educación SPECIAL ISSUE 2: Higher education in Asia”, 2019. September. accepted to be published in 2020.
- 佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程』東京大学出版会、2002年。
- ———「進学名門校『女子ミッション・スクール』の歴史社会学的分析—都市市民層の教育期待に着目して—」『日本教育社会学会第68回大会発表要旨集録』2016年、12-13頁。
- ———「近代日本における都市中上流階級の階層文化と教育」『電気通信大学紀要』第24巻 第1号、2012年、19-29頁。
- ———「婦人雑誌『新女界』の記事および執筆者の学歴・キャリアからみる知識人層の女子教育観と学校選択」『電気通信大学紀要』第29巻 第1号、2017年、1-14頁。
- Sally A. Hastings, *Traveling to Learn, Learning to Lead: Japanese Women as American College Students, 1900-1941*, Alisa Freedman, Laura Miller and Christine R. Yano eds., “Modern Girls on the Go: Gender, Mobility and Labor in Japan”, Stanford University Press, 2012, pp.193-208.
- 柴沼晶子「英国留学で得たもの—安井てつと大江スミの場合を比較して」『敬和学園大学紀要』第8号、1999年、243-267頁。
- 渋谷良子・内田道子・山本芳美『ジャパニーズ・スカラーシップ 1893-1976の記録—日本最初の女性のための留学制度』、ぶんしん出版、2015年。
- 頌栄女子学院『頌栄女子学院百年史』、1984年。
- 聖路加国際大学『聖路加看護大学五十年史』、1970年。
- ———『聖路加国際病院 八十年史』、1982年。
- 高橋裕子『津田梅子の社会史』玉川大学出版部、2002年。
- 津上智実『山本通時代の神戸女学院』日本キリスト教団出版局、2015年。
- 辻直人『近代日本海外留学の目的変容—文部省留學生の派遣実態について』、東信堂、2010年。
- 手塚晃・国立教育会館編『幕末明治 海外渡航者総覧』第1、2、3巻、柏書房、1992年。
- 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年。
- 富田仁編集『海を越えた日本人名事典』新訂増補、日外アソシエーツ、2005年。
- 東京慈恵会医科大学『東京慈恵会医科大学百年史』、1980年。
- 東京女子高等師範学校 櫻蔭会編『桜蔭会史』、1940年。
- ナターリア・ティコノフ／前田更子 訳「第1章 女性に、世界に開かれる—スイスの大学における女性の進出と国際化1870-1930年」、香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育』昭和堂、2008年、21-53頁。
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年。
- 日本女子大学『日本女子大学学園事典 創立100年の軌跡』、2001年。
- Noriko Kawamura Ishii, *American Women Missionaries at Kobe College, 1873-1909: New Dimensions in Gender*, A Routledge series, Edward Beauchamp ed. “East Asia : History, Politics, Sociology, Culture”, Routledge, 2004.
- 橋本鉦市『専門職養成の日本的構造』玉川大学出版部、2009年。
- 橋本伸也「女性医師課程の誕生と消滅—帝政期ロシアにおける女性医師と医学教育」、望田幸男・田村栄子編『身体と医療の教育社会史』昭和堂、2003年。
- Mara Patessio and Mariko Ogawa, *To Become a Woman Doctor in Early Meiji Japan (1868-1890): Women's Struggles and Ambitions*, “Historia Scientiarum” Vol.15-2, 2005, pp.159-176.
- 三崎裕子「明治女医の基礎資料」『日本医史学雑誌』第54巻第3号、2008年。
- 堀田国元『ディスカバー岡見京』堀田国元刊行、2016年。
- 松田誠『高木兼寛の医学』東京慈恵会医科大学、2007年。
- 山口みどり「英国国教会とその娘たち」香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育』、昭和堂、2008年、227-253頁。
- Yoko Yamasaki, *Tetsu Yasui and Transcultural Influences in Educational Reforms for Women*. “Bulletin Research Institute for Linguistic Cultural Studies”, 2015, pp.101-121.
- 吉川利一『津田梅子伝』津田塾同窓会、1956年。
- 横浜プロテスタント史研究会編『横浜開港と宣教師たち』有隣新書、2008年。
- 横浜開港記念館『図説 横浜外国人居留地』有隣堂、1998年。